

南相馬市原町赤十字奉仕団

南相馬市原町赤十字奉仕団				
実施年度	実施回	内容	実施場所	参加人数
1 19年3月(水)	1回	にこにこ健康教室	原町市中 公民館及福祉会	52人
2011年度				
実施回	実施日	内容	実施場所	参加人数
1	7月29日(金)	被災者に対するにこにこ健康教室	原町市中 公民館(1階)	55人
2	7月29日(金)	55人	公民館(1階)	55人
3	10月19日(水)	被災者に対するにこにこ健康教室	原町市中 公民館(1階)	59人
4	10月21日(金)	健康教室(高齢者対象)と交流本	原町市中 公民館(1階)	46人
5	11月12日(水)	健康教室(高齢者対象)と交流本	原町市中 公民館(1階)	59人
6	11月24日(木)	健康教室(高齢者対象)	原町市中 公民館(1階)	41人
7	12月28日(水)	にこにこ健康教室	原町市中 公民館(1階)	58人
8	1月16日(日)	健康教室(高齢者対象)と交流本	原町市中 公民館(1階)	56人
9	1月16日(日)	健康教室(高齢者対象)と交流本	原町市中 公民館(1階)	55人
2012年度				
実施回	実施日	内容	実施場所	参加人数
1	3月29日(水)	にこにこ健康教室	原町市中 公民館(1階)	57人
2	4月16日(水)	健康教室(高齢者対象)と交流本	原町市中 公民館(1階)	72人
3	5月16日(水)	健康教室(高齢者対象)と交流本	原町市中 公民館(1階)	59人
4	10月10日(水)	にこにこ健康教室	原町市中 公民館(1階)	57人
5	11月24日(水)	健康教室(高齢者対象)と交流本	原町市中 公民館(1階)	51人

活動の実績はこちら



★いつから活動されていますか？

- 2011年3月からすぐに活動に入った。この時は、津波で避難してきた沿岸部の方々のために炊き出しを行った。

★対象はどちらの地域の方ですか？

- 南相馬市民、浪江町民の皆さん。

★どんな活動をされていますか？

- 発災直後から、市役所からの指示でスタッフ・ボランティアに炊き出しをした。
- おむすび1,000個をにぎった。各家庭から梅干を持ち寄り、しその葉もなくなり、最後の方は塩も少なかった。
- 2011年4月初旬～21日の入学式まで、青年会議所、退職した先生、赤十字奉仕団は、何らかの事情があって避難することが出来なかった30人の子ども達を対象に、「子ども寺小屋」を開設した。奉仕団は、受付、給食を担当した。会場は常福寺。食材は相馬市まで取りに行った。食材の調達からメニューも全て奉仕団が計画実行。調味料などは自宅から持ち寄った。毎日子供たちは食事をとても楽しみにしていた。
- 5/11頃～下旬まで、がれき撤去作業や行方不明家族の捜索をしている地域消防隊員が、道端に腰をおろしてカップラーメンを食べている話を社会福祉協議会から聞いた。そこで奉仕団は何か温かい物をと考え、その地域の公会堂に調理器具や少しの食材を持ち寄り、昼食の提供活動を始めた。後日、代表の方がお礼に来て下さった。
- 7/20、県内の奉仕団員34人が来訪。震災後4か月であり、唯一開館していた野馬追通りの銘醸館で懇談会を開いた。
- 9/2、日本赤十字社の近衛社長の被災地視察の案内を行った。
- ショックで、食事を差し出しても話しかけても無言であったが、行方不明の子ども誕生日など徐々にお話をしてくれるようになった。休憩室にお花を置くこともした。少し心のゆとりが生まれた。
- 10/26、屋内退避の圧迫感を和らげるため、また「メタボになりそう」との声もあったので、在宅高齢者40名を対象に、市内のお寺(常福寺)を会場として「赤十字にこにこ健康教室」を開催した内容は、健康体操、ハイゼックス昼食、手編みのブローチで「ファッションショー」を行い、楽しい一日となった。この日を記念し、復興事業として現在も活動している。(委員会を開催して決定した。)
- 11月、保健センターの依頼で献血の呼びかけ活動を再開した。市内はもとより、遠くは会津に避難している方々など100名も献血者が来てくれて感激した。(2011年12/16、2012年1/24、2/17、3/2にも活動を行った。)
- 11/26、石神生涯学習センターで「赤十字にこにこ健康教室」を開催。2012年になって、1/28に道の駅で開催し、大勢の方(40人)が参加者し、ハイゼックスが好評であった。2/28には、高見町第一仮設住宅で開催し、お楽しみ会の生花が好評だった。3/27には高平生涯学習センターで開催した。



- 赤十字にここ健康教室は、5ヶ所の仮設住宅（高見町第一、第二、牛越、八方内、大鹿）、お寺、生涯学習センター、道の駅、福祉会館を会場に開催している。震災後は月1回だったが、2013年より、年6回とした。

★活動を始める際、どこでだれと協議しましたか(どなたの発案ですか?)

- 発災直後は防災放送と市役所の指示で炊き出しをした。
- 小野委員長はある人から「赤十字はこのような状況の時には逃げてはいけないのでは?」と言われ、「自分はこういう立場だったのか」と思った。
- 奉仕団員会を開催し協議した。日赤福島県支部からの要請もあった。子ども寺子屋、地域消防隊の支援は社会福祉協議会からの要請、献血は保健センターからの依頼で再開した。
- 原町赤十字奉仕団の初代委員長は、元赤十字従軍看護師であった。今回のような大災害にあって、この方がご健在であれば、「行ってきなさい」と強く言われたらと思うと、背中を押された気分がした。初代委員長は2011年9月8日、避難先にて永眠(99歳)した。

★被災された方々の声はどうでしたか?

- 「子ども寺小屋」に来ていた子供たちは「今日のお昼は何かな?」「カレーだね!」ととても食事を楽しみにしていた。震災から数年後、当時の子供たちから「あの時はどうもありがとう、美味しかった!」と言われた。
- 「子ども寺子屋」に子どもを迎えに来た保護者から、玉ねぎ2個、ジャガイモ2個、人参1本等の支援物資を受け取るために1時間並んだことを聞き、受忍している様子がうかがわれた。
- 日中一人ぼっちの高齢者は集会所に来るのが楽しみだと言ってくれる。(仮設住宅入居者)
- ご家族の捜索をしている「地域消防隊」はショックで無言、心が動かなかった。一週間位して、徐々に話をしてくれるようになった。この消防団員たちも、2015年9月の台風18号で大きな被害を受けた茨城県常総地区のボランティア活動に従事するなどし、現在では前向きに活動をしている。

★支援活動において良かったことは何かありますか?

- 「苦労話」をお互いにする事、お話をするという事が非常に大切だと思った。お話しを通じて慰め合っている。同じ境遇だから、それが出来るのだと思う。
- 近衛社長が、本社から被災地に視察に来て下さったこと。赤い救護服を着て、津波で入所者がベッドのまま流された介護老人施設や被災地、海岸沿いなどを回って下さった。赤十字のロゴマークの存在感は非常に大きく、素晴らしかった。勇気と安ど感が湧いた。
- 復興のための支援活動は、赤十字が一番早かった。
- 八方内仮設住宅に入居している浪江町民の女性の方から、日赤の支援行事(芋煮会、十日市 in 二本松)は、仮設住宅入居者の交流と精神的、身体的ストレス解消の大きな転機となり、孤独死を防止することができたとのお礼の手紙が届いた。
- 仮設住宅入居者、借上げ住宅入居者、南相馬市に住宅を構えた方、それぞれ南相馬市に避難している方々にとって、「赤十字にここ健康教室」が出会いの場、再開の場として有効に活用されている。



★大変だったこと・困ったこと等ありましたらお聞かせ下さい

- 炊き出しや赤十字健康教室の際に、救援物資が原町区には届かず、隣接する相馬市に荷受けする体制が散らされていた。そのため物資が枯渇していった。
- 食器がなく、衛生的な調理が出来ない。『ハイゼックス袋』がないこと。どこに売っていますか?という問い合わせが多かった。
- 「屋内退避」であったが、屋内は避難者で溢れており、やむなく屋外での物資配布となっていた。
- 県内奉仕団が7月にバス1台34名規模で、原町区の心配をして訪れた。その際に懇談会を行ったが、逆に原町赤十字奉仕団が「おもてなし」をするような形になってしまった。一方で、屋根にはブルーシートがかかっており、津波で壊滅的な被害を受けた惨状であったことから、おもてなしが十分できなかったという思いを持った。
- 団員が減少し NPO が台頭している。赤十字奉仕団の無償ボランティアというのが若い人には受け入れられないのでは…。今後赤十字活動はどうなっていくのか心配である。

★支援活動前に知っていれば良かったことは何かありますか？

- 放射線の知識がなく無駄な動きが多かった。
- もっと、奉仕団が主体的に活動をして良かったのではないかと後悔している。
- 震災に備えることの大切さ。

★今後の支援活動において何か新しい取組み等がありましたらお聞かせ下さい

- 高齢者向けの体と心のケア。
- 在宅の被災者と、借り上げ住宅の被災者との交流の場がない。今後検討したいと思う反面、交流会は環境が異なると難しい。
- 2013年9月、長野県下伊那郡売木(うるぎ)村の赤十字奉仕団が、研修会で遠方はるばるバスで8時間かけて来訪した。会場は道の駅。避難時の苦労話をして、涙を流しながら真剣に聞いていただいて、癒された。たくさんの野菜、くだものをいただき、感激と感謝の気持ちで胸が熱くなった。南相馬市出身で飯田市三日市場で飲食店を営む男性の仲介で奉仕団とともに訪問いただいた。売木村村長は、野菜を送り息の長い交流で奉仕団を元気づけたいと話していた。
昨年(2015年)暮れに届いた食材を使用し、高見町仮設住宅にて、「赤十字にこここ健康教室」を開催し、大好評だった。人と人が助け合う心の絆の尊さを実感した。
- 震災から約5年が経過する。震災前の奉仕団事業計画に少しずつ戻って来ている。献血活動、防災訓練、各種街頭募金、福祉施設奉仕、高齢者福祉事業への協力、復興支援活動、各種講習会参加などを実施している。
- 以前は大変な時なので原町区に来ていただかなくても良いという気持ちであったが、今では原町区の現状をもっともっと知ってもらいたい、訪問してもらいたいという心境になっている。
- 今回の震災の教訓をどう活かすのか、それがこれからの課題である。震災を風化させないための工夫と手段が必要。



★支援者(奉仕団や他団体)の「こころのケア」の必要性を感じますか？

- お葬式など立て続けに起こったが、奉仕団活動が続き悲しむ余裕がなかった。その意味では、赤十字に救われた。団員が自分の任務を責任を持って果たしたと思った。これが赤十字だと思った。
- よく頑張るねと言われたが、皆さんの声が励ましとなり、活動が続けられた。貴重だった。半年は、泣いてばかりだったが、家族の捜索では動かなければならなかった。周りからは力をもらい、支えと生きがいになっていった。赤十字の活動があったから、私が生きられた。
- 皆さんのお世話をしているから、暇がなくて良い。黙っていることはいけない。忙しいという事が、私は良い。奉仕団活動で予定がいっぱいあるのが良い。
- 一緒に活動したことは忘れない。温かい心が伝わってきた。活動を通して得たあの時の笑顔、あの時の汗、あの時の涙、あの時の風は、奉仕団活動をした人にしか味わうことのできない宝物。
- 奉仕団としては被災者という意識はあまりない。だから支援者として心のケアが必要であるとも思っていない。
- 支援活動をしながら、「こころのケア」を自然に受けていた。心から深く感謝している。

南相馬市原町赤十字奉仕団について

原町赤十字奉仕団は、1964年(昭和39年)に創設された「献血友の会」が母体となっている。その後1977年(昭和52年)、献血事業に協力し地域福祉のニーズに応える奉仕活動を行うという趣旨で設立された。浜通りにある南相馬市原町区は、2011年(平成23年)3月11日に震度6を観測した。